

2026_0525 「ザクロの花」 日々の理科 4306 号

お茶の水女子大学 サイエンス&エデュケーション研究所 田中 千尋

初夏の小石川植物園で咲いていたザクロの花です。濃い朱赤色の花弁が強い光を受け、林内の新緑を背景に浮かび上がっていました。ザクロ（石榴、学名 *Punica granatum*）はミソハギ科ザクロ属の落葉小高木で、西アジア原産とされます。日本には古くに渡来し、庭木や果樹として広く親しまれてきました。この花は、ややしわのある厚い花弁をもち、中央には無数のおしべが密集しています。花の付け根には壺のように硬くふくらんだ部分がありますが、これは発達した萼であり、この内部に後の果実となる子房が収められています。

ザクロの最大の特徴の一つは、一つの果実の中に非常に多くの種子をつくることです。その秘密は、花の内部構造にあります。子房の内部は複数の部屋に分かれ、それぞれに大量の胚珠が並んでいます。昆虫によって運ばれた花粉が柱頭につくと、花粉管が伸びて多数の胚珠が受精し、それぞれが独立した種子へ発達します。つまり、ザクロは「一つの花の中に、最初から大量の“種子のもと”を準備している植物」なのです。秋に果実を割ると、赤い半透明の粒がぎっしり並んでいます。私たちが食べている部分は果肉ではなく、種子を包む仮種皮です。

この写真でも、花の中心に密集するおしべの奥に、将来多数の種子を生み出す子房が隠れています。花の姿はどこか南国的で華やかですが、その内部では、すでに秋の果実へ向けた精巧な準備が始まっています。小石川植物園の木陰で見上げた一輪のザクロの花は、「花」と「果実」が連続した存在であることを教えてくれます。

(2026年5月中旬／文京区小石川植物園内)

